
零中隊所属 特攻野郎共

spas12K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零中隊所属 特攻野郎共

【Nコード】

N3480Z

【作者名】

spas12k

【あらすじ】

警察直属ではあるがその存在を秘匿している組織。それに所属している人間と武偵の人間とのお話です。

行くぜ野郎ども！！（前書き）

文句だけはご勘弁を！！

異常です。

以上です。

行くぜ野郎ども！！

「めんどい任務やでこれはあゝ」

高速で移動するヘリの中、伸びをしつつ間抜けな声を出す。

「そうですね」

帰ってきたのは、これまた気が抜けた声。

「ルチアは相変わらず冷たいなあ」

「そうですね？」

いつもと変わらずのんびりな少女ルチアは自分の武器を点検していた。

ZB26チエコの傑作軽機関銃だ。

腰にはVZ61スコープオン短機関銃、CZ75拳銃。

「お前、ほんまにチエコの銃が好きだな」

「ええ」

白長髪の髪を揺らして肯定するだけだった。

つてまあ、人のことは言えず自分の持っている銃も相当マニアックだ。

stgw510というスイスの全主力突撃銃だ。

アサルトライフルという部類に入るが、308ウィンチエスターよりも強力な実包を使う。

腰にはP210これもスイス製だ。

加えるところでも滅茶苦茶高い。

「それと、任務中はコールサインで呼んでくださいですよ」

「はいよ、ヴェスパ4さん」

「それで、よろしいですよ。健介さん」

「お前もコールサインで呼べや！」

思わず突っ込む。

「あい・さ〜、なのですよ」

適当な返事が返ってくる。

固い椅子にもたれて時計を見る。

「そろそろ時間やな」

「ですね」

その折だった。

「ヴェスパ3、4降下用意」

へりの機長が告げる。

「了解や」「了解ですよ」

その言葉を合図に、機体足部のハッチが開く。

そのまま飛び降りる。

続いてルチアも飛び降りる。

数十メートルの距離を慣性を受けて落ちながら目的の建物に着地する。

衝撃でコンクリが割れて屋上に大きなひびが入る。

「毎度すごい襲撃の仕方やな」

「ですね」

屋上の扉を探して素手でぶち破る。

「さあ、やりまっか」

「了解だ」

二人それぞれ別々に移動する。

目の前のドアを開けると、黒スーツ姿の威つい男が数人いた。

「誰や。どこの奴や!？」

そう叫んだ男の体が穴だらけになる。

そのまま横なぎに7.5 x 55 mm のフルサイズカートリッジが

吐き出される。

後ろの壁まで穴だらけにして男が全員倒れていた。

「相変わらず、この銃は強いなあ。惚れ直すわ」

そう呟いて、どんどん突き進んでいく。

次々と弾倉を取り換えて、銃撃の手を緩めない。

敵がいると思えば壁の後ろにしようが問答無用で撃ち殺していく。

前に十階建ての建物の三階まで進んだところで奇妙な者を見つける。

「あちゃあ、やなもん見つけてもた」

健介が見つけたのは傷だらけの少女だった。

「お、まだ生きとるな」

傷だらけで周囲に血が飛び散っていたが、どれも死に至る傷ではない。

「本部か？ 女の子を一人助けたんや、回収へりに医者乗せといて」

「こちら本部、了解」

短いやり取りで通信が切れる。

「ヴェスパ4よりヴェスパ3へ、タゲは潰したよです」

「よーやった、ほな撤収しましょか」

「了解です」

その折、銃声が聞こえる。

「ヴェスパ3か？」

「私じゃないですね。武偵の子たちです」

「チっ、はようズラかるか」

あんまし面白くない連中が来たものだと思態つきながら、屋上まで戻る。

ルチアは先に到着していて、へりの誘導をしていた。

その数分後に撤収は完了して空を飛んでいた。

少女を拾ったという変わったことがあったが、まあ上出来だ。

行くぜ野郎ども!! (後書き)

まったくアリア関係なくでごめんなさい。
次回で登場です

高・校・編・入 命令！！

「はあ！ そんなん絶対嫌やで！！」

「命令だ」

「ホワイ！ 何でそんな命令が回ってくんねん！？」

「機密だ」

髭を生やしたの中年男が機械的に言った。

「それにヴェスパ3、ホワイではなくフォワイだ」

「んなもん、訂正せんでええわ！」

「いや、重要だ」

男はあくまで毅然として言い張る。

「だ・か・ら！ なんで俺が高校しかもく武偵高へ編入するんだ」

机をバンバン叩きながら講義する。

「がんばれ。ヴェスパ4とヴェスパ7も一緒だ」

説明しておくくとヴェスパ1〜6はこの中隊での俺たち一人一人のサインだ。

ん？ ？？

「ストオオオツップ！ ヴェスパ7って誰や！ いつ増えてん！！？」

「昨日だ。そして昨日君が拾ってきた少女だ」

「ああ、あの子か？ それなら納得する……わけあるか！」

「うるさいなお前は、命令出す遂行しろ」

「うえええい」

全身全霊で願い下げたいが

目の前、天田中尉からの命令は絶対だ、従わなければならない。

「わかりやしたよ」

「素直でよい。そしてヴェスパ7だが君と同じ16歳。武器はロシア系だ」

「スペックと経歴は？」

「機密だ」

「？」

初めてのことだ、いままでヴェスパは大抵の経歴とスペックは教えてくれた。

だが、今回は情報無しときた。

「まいつか。ヴェスパ着任は理由と信頼込やからな」

「そういうことだ」

そうこうしていると、入り口の自動ドアが開く。

そこに亜麻色の小柄な少女が立っていた。

「ライカ・スクリヤロフ女史だ」

「よろしくお願いしまへふっ」

入って来ようとして盛大にこける。

「見ての通りドジだが。うまくやってくれ以上」

話も終わったので、ライカと呼ばれる少女を連れて尉官室を出る。その後いろいろ身支度をした後、専用の車で遠くの東京を目指す。

さらば大阪

車内から小さく敬礼する。

と言うのもこの専用車窓は特殊ガラスで光が通らない、よって外は見えない。

車内も運転席とは隔離されていて、座り方も向かい合う形だ。

これは、車内でも会議を行うためだ。

今は三人の人間が中央のテーブルに銃を広げている。

俺はstgw550、510突撃銃とP210拳銃そしてスペクトラ短機関銃。

ルチアはZB26チェコ軽機関銃、VZ61スコープオン短機関銃、CZ75拳銃。

さらにはZVI対物銃まで用意している。

ライカはAK74突撃銃、PP-2000 短機関銃、SVD狙撃銃、スチエツキン自動拳銃。

V-94対物狙撃銃まで用意している。

ここまで、よく装備が整えられたと感心しつつ、この先のこと
に頭を抱えるのだった。

高・校・編・入 命令！！（後書き）

すいません、まだ何故か武偵が出ていません！！
しばらくお待ちを

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3480z/>

零中隊所属 特攻野郎共

2011年12月12日00時54分発行